

CESCHI NEWS LETTER

京都大学大学院文学研究科附属 文化遺産学・人文知連携センター ニュースレター

京都大学病院東構内出土の和歌墨書土器について

—『古今和歌集』収録の一首に該当する可能性が高まる—

2001年に、京都大学医学部附属病院東構内南東辺を発掘調査したところ、1基の井戸跡から、3片の墨書土器がみつかりました。それらは、12世紀初頭ごろに作られた土師器小皿の破片で、内外面にそれぞれ墨書がみうけられます。一見して多くのひらがなが書かれているのがわかるのですが、これまでに、それらに対する釈読などが試みられたことは、一切ありませんでした。本墨書土器を所蔵する京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センターの京大文化遺産調査活用部門では、2019年末より、考古学・文献史学の他に、国文学の研究者も加わって、共同研究を開始しました。

検討の結果、3片の墨書土器はつなぎあわせることができること、すなわち、同一個体であることが明

らかになりました。そのうえで、肉眼による観察に加えて、赤外線機器を用いて墨書の判読にとりかかり、検討会を行った結果、以下のような事柄が明らかになりました。

まず、内面の墨書に関しては、10世紀初頭にまとめられた、最初の勅撰集である『古今和歌集』に収められている一首に相当する蓋然性が高いことがわかりました。内面の「こゝろのゆき／をらぬひそ／□（〔なカ〕）き」は、『古今和歌集』巻第7の358番歌、凡河内躬恒（おおしこうちのみつね）作の「山高み雲居（くもゐ）に見ゆる桜花（さくらばな）心のゆきて折らぬ日ぞなき」の下句「心のゆきて折らぬ日ぞなき」に一致します。上の句ははっきりしませんが、下の句はいろいろな和歌に用いるのには、あまり一般



和歌墨書土器（外面）



和歌墨書土器（内面）

的な表現ではありません。このことから、358 番歌が書かれている可能性が高いと判断されます。

また、各地から出土している和歌墨書土器について調査をおこないました。その結果、平安時代のなかでも、9・10 世紀の和歌墨書土器は、何点かみついている一方、11・12 世紀の例はこれまで確認されていないことが知られました。こうしたことから、本和歌墨書土器の重要性が指摘できます。『古今和歌集』は、後世の作歌に大きな影響を与えたのですが、本資料は、平安時代後期の和歌文化の様相を考えるうえでも、貴重な素材を提出しえたといえます。

本土器の出土地点は、院政の拠点であった白河の地に含まれ、院御所である白河南殿の北方に位置し

ています。それゆえに、貴人の邸宅が所在していた蓋然性が高く、そうした点について、できる限り考察を加えていく所存です。

本研究成果については、2020 年 12 月 15 日に記者発表をおこない、多くの新聞などに取り上げられました。今後は、土器に和歌が書かれた理由、この和歌墨書土器がみつかった遺跡の性格などについて、国文学・考古学・文献史学の各分野から、さらに総合的な検討を行う予定です。また、コロナ禍の収束後には、和歌墨書土器の展示や、シンポジウムなどを通して、各分野の研究者のみならず、一般の方々にも、本資料の重要性について広く知っていただく企画を準備していきたいと考えています。

公開シンポジウム「慶州・金冠塚が語りかけるもの」

2021 年 3 月 20 日（土）、zoom ウェビナーを用いるオンライン形式で、シンポジウム「慶州・金冠塚が語りかけるもの」を開催しました。

本シンポジウムは、人文科学研究所と共同で日本学術振興会から受託した『課題設定による先導的人文学・社会科学研究推進事業』（グローバル展開プログラム）「逸失の危機にある文化遺産情報の保全・復元・活用に関する日・欧・アジア国際共同事業」により進めている、京都大学所蔵の朝鮮古蹟調査事業関係資料のデジタル化事業の成果の一端を紹介するために企画されました。

今回のシンポジウムのテーマは、1921 年 10 月に偶然に発見され、京都帝国大学考古学教室で報告書の作成がおこなわれた慶州・金冠塚をめぐる諸問題です。金冠をはじめとする大量の出土遺物をめぐる、慶州在住朝鮮人と遺物の整理・報告に関わった日本人研究者の行動、そして大韓民国で進められた再調査・整理作業の成果について、3 名の演者が報告をおこないました。

京都大学大学院文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センターシンポジウム

慶州・金冠塚が語りかけるもの

1921年10月、植民地支配下の朝鮮・慶州市街の一角で、後に「金冠塚」と命名される古墳から、金冠をはじめとする大量の遺物が発見されました。本シンポジウムでは、京都大学に遺されている当時の調査関連資料の紹介を兼ねて、金冠塚の発見が、当時の人々や、現在にいたるまでの日本と朝鮮の考古学的研究にどのような影響を与えてきたのかについて考えます。

2021年3月20日（土）
13時30分～17時30分

オンライン開催 **参加無料（先着順200名）**
視聴するためには事前登録が必要です。QRコードまたは下記URLよりお申し込みください。
<http://bit.do/Ceschi20210320>

プログラム
趣旨説明 吉井 秀夫
(文学研究科附属文化遺産学・人文知連携センター長)

講演
植民地慶州、古蹟調査と現地住民
—「金冠塚遺物慶州留置運動」を中心に—
荒木 潤
(韓国・慶北大学校人文学院客員研究員)

「京都大学所蔵金冠塚関連資料について」
吉井 秀夫

「金冠塚再発掘の成果と課題」
金大煥
(韓国・国立中央博物館学芸研究士)

討論：吉井秀夫・荒木潤・金大煥



お問い合わせ：京都大学文学研究科附属
文化遺産学・人文知連携センター
京大文化遺産学調査推進部門
TEL：075(754-7491)

主催：京都大学文学研究科附属
文化遺産学・人文知連携センター

荒木潤「植民地慶州、古蹟調査と現地住民―「金冠塚遺物慶州留置運動」を中心に―」は、総督府博物館関連文書や当時の新聞記事などの詳細な検討をもとに、京城（現在のソウル）に搬出された金冠塚の遺物を慶州に留め置こうする運動をめぐる、多様な力学とその意味について検討をおこないました。そして、これまで一般的に知られてきた諸鹿央雄ら慶州居留日本人の思惑とは別に、慶州在住朝鮮人の行動が本運動に果たした役割が明らかにされました。

吉井秀夫「京都大学所蔵金冠塚関連資料について」は、朝鮮古蹟調査事業に関連する資料が、現在、大韓民国と日本の複数箇所に分散しており、そのデジタル化・Web公開による共有が進められていることを紹介しました。その上で、京都大学が所蔵する金冠塚関連資料を通して、京都帝国大学考古学教室で金冠塚の報告書が作成された過程についての諸事情を明らかにすることができることを指摘しました。

金大煥「金冠塚再発掘の成果と課題」は、2013年から国立中央博物館が進めている「朝鮮総督府博物館の資料整理事業」の一環として出土遺物や関係資料が再整理され、さらに金冠塚が再発掘されることになった経緯を紹介しました。そして、再発掘調査に

より明らかになった木槨や積石部の構造を元に、積石部の築造プロセスの復元案とその歴史的意義が提示されました。

報告後は、参加者からの質問に答える中で、さらに議論を深めていきました。金冠塚の発見をめぐる問題に関しては、墳墓の発掘・盗掘が当時の朝鮮人にとってどのように受け止められていたのか、また金冠塚から大量の遺物が発見されたことを契機として、慶州をめぐる観光がどのように変化していったのかについて、議論しました。また、金冠塚の再発掘調査成果をめぐることは、朝鮮半島の他地域における墳墓の構造との関係や、墳墓の構築過程でおこなわれる祭祀とその意味について、意見交換がおこなわれました。

今回のシンポジウムは、あえて「国際シンポジウム」とはせず、日本国内からのみの参加を前提として準備を進めました。しかし、特別な広報をしなかったにもかかわらず、大韓民国などから20名近い参加者がありました。今回の経験をもとに、オンライン式による「国際シンポジウム」の可能性も、さらに追求していきたいと考えています。

センター開催行事日誌(2021年1月～3月)

■オンライン講義「立ち止まって考える」シーズン2に講義を提供しました。

人社未来系発信ユニットのオンライン講義「立ち止まって考える」シーズン2に、文化遺産学・人文知連携センターの教員が講義を提供しました。

文化遺産学研究施設からは、連続講義「文化遺産からみた人類と災禍」(計6回)を提供しました。

第1回：吉井秀夫「スペインかぜと濱田耕作・梅原末治の朝鮮古蹟調査(1)」2月27日(土)11時

第2回：吉井秀夫「スペインかぜと濱田耕作・梅原

末治の朝鮮古蹟調査(2)」3月6日(土)11時
第3回：内記理「京都大学の学術調査隊によるガンダーラ調査」3月13日(土)11時
第4回：内記理「ガンダーラで認められた大災害の痕跡」3月14日(日)11時
第5回：富井眞「103年スケールの災禍―遺跡発掘調査ならでは―」3月20日(土)11時
第6回：富井眞「先史時代の災禍とその前後のヒト被災・復興は証明可能か―」3月21日(日)11時
人文知連携拠点からは、喜多千草教授が、「技術文

化史から考えるポストコロナ社会」というテーマで、以下の2回の講義をおこないました。

第1回：「e-topia 再考：情報社会論から考える ポストコロナの都市」2月13日（日）11時

第2回：「コミュニケーション装置としての コンピュータ」2月20日（日）11時

各講義は、下記のHPを通して視聴が可能です。

【オンライン公開講義】”立ち止まって、考える”シリーズ2 <https://ukihss.cpier.kyoto-u.ac.jp/2313/>

■2020年12月21日（月）～25日（金）

京大文化遺産活用部門のメンバーが昨年度より進めている通称「白川道プロジェクト」（科学研究費補助金基盤研究(C)19K01094「都市近郊歴史像の再構築ー京都・白川道の研究を基盤として」代表・千葉豊）の一環として、吉田キャンパス本部構内において発掘調査を実施しました。

<https://www.ceschi.bun.kyoto-u.ac.jp/arcKU/topix32.html>

■2021年1月15日（金）

（人文知連携拠点）人文知連携共同研究会 第四回東アジア「間文化研究会」を開催しました。

<https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/ceschi/seminar20210115/>

■2021年1月27日（水）

（人文知連携拠点）人文知連携共同研究会 第五回東アジア「間文化研究会」を開催しました。

<https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/ceschi/seminar20210127/>

■2021年3月13日（土）

（内陸アジア学推進部門）第19回中央アジア古文書研究セミナーを開催しました。

■2021年3月30日（火）

（人文知連携拠点）人文知連携共同研究会「人文学の方法論」第二回研究会を開催しました。

<https://www.bun.kyoto-u.ac.jp/ceschi/seminar20210330/>

■2021年3月17日（水）～2021年5月16日（日）

（新型コロナウイルス感染拡大に対する緊急事態宣言にともなう休館期間をはさみ、開催期間が6月27日（日）まで延長となりました。）

（京大文化遺産調査活用部門）京都大学総合博物館との共催により、特別展「文化財発掘Ⅶ 木を遺（のこ）す、木を伝える ー木製品の調査と保存ー」を開催しています。

<https://www.ceschi.bun.kyoto-u.ac.jp/arcKU/topix33.html>

また本特別展と連携した展示が京都府立図書館でおこなわれ（3月26日（金）～4月21日（水））、本センターが所蔵する遺物を出品しました。

<https://www.library.pref.kyoto.jp/?exhibition=27682>

京都大学大学院文学研究科附属 文化遺産学・人文知連携センター

〒606-8501 京都市左京区吉田本町京都大学大学院文学研究科

URL：http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/ceschi/ces-top_page/

